

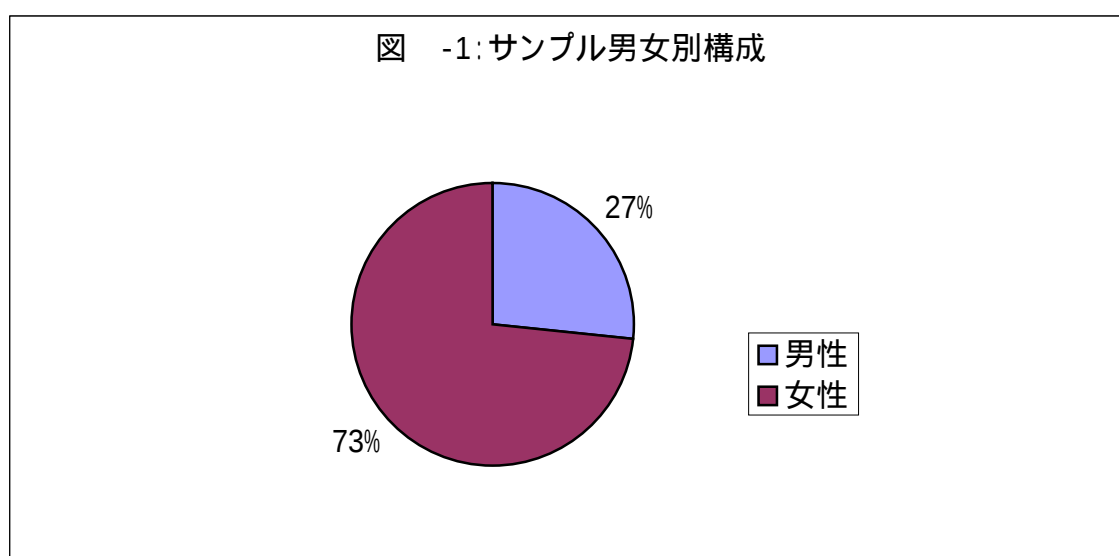
．ステップファミリーの家族状況

ここでは本調査サンプルについて、下記の領域ごとに概略を見ていく。なお、 章にも述べたように本調査のデータにおいて男女比が著しく不均衡であり、さらに男性回答者の多くは本調査の女性回答者のパートナーであるケースが多いため、質問項目によっては同一カップル（あるいは世帯）についての情報が重複してしまう可能性がある。以下の記述にあたって厳密さを増すため、場合によっては男性サンプルを除外し、女性サンプルのみで分析を進めることがあることをご了承いただきたい。

1. 性別構成
2. 年齢構成
3. 学歴構成
4. 仕事
5. 年収
6. 居住形態
7. 初婚再婚の別
8. 結婚年数
9. パートナーとの同別居
10. 親との同別居
11. 子ども関連

1. 回答者の男女構成

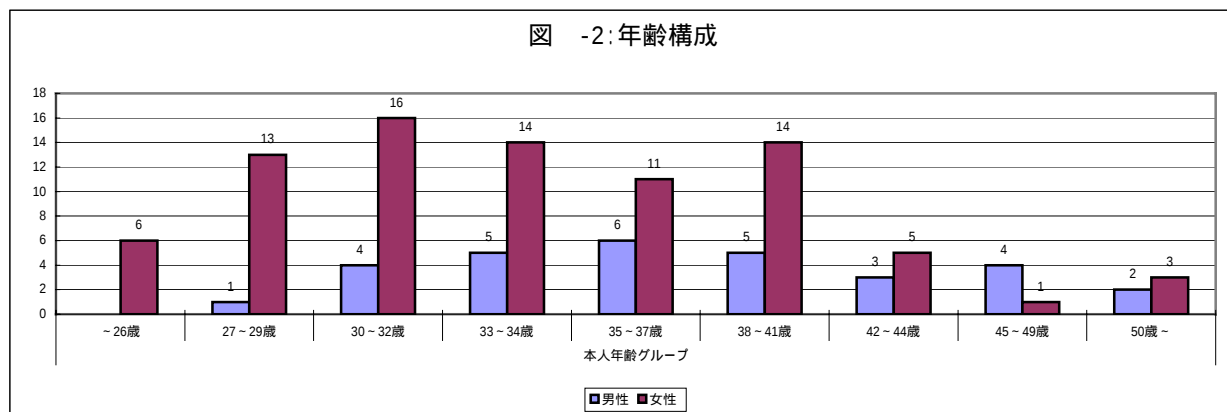
本調査の回答者数は男性 30 人、女性 83 人である。男女比を図 -1 にまとめた。圧倒的に女性が多く、比較対照するには男性サンプルが非常に少なくなっている。



2. 年齢構成

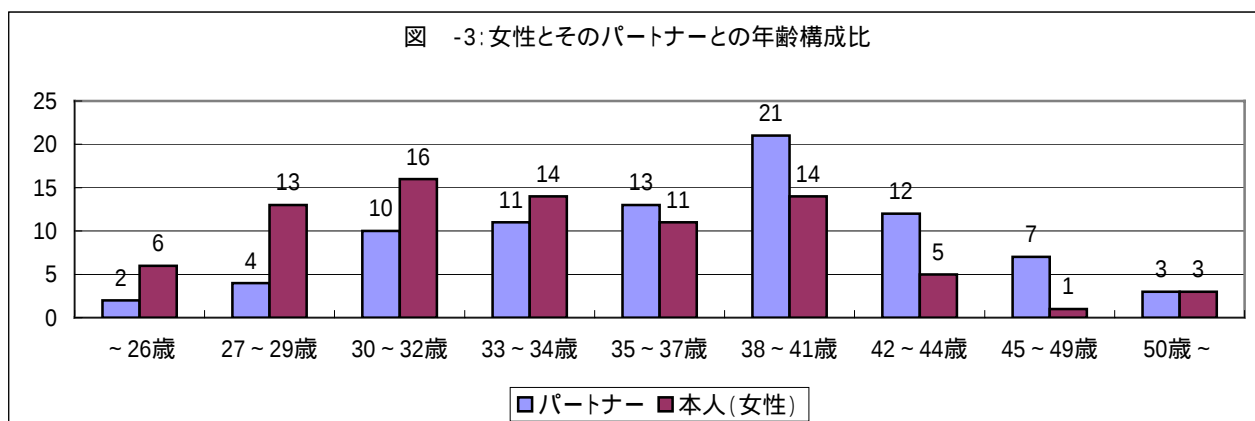
(1) 本人の年齢

自身の年齢を見てみると、男性の場合には平均値は 39.4 歳、中央値は 37 歳となる。女性の場合には平均値が 34.3 歳で中央値は 33 歳であった。また、男性側の最年少は 29 歳で、最年長は 69 歳。女性側の最年少は 22 歳、最年長は 60 歳であった。本調査においてはサンプルの年齢層が比較的若い層に集中している。特に 50 代以降のデータが不足しており、それは子どもの年齢階層にも影響を及ぼしている。



(2) パートナーの年齢

パートナーの年齢は、男性回答者のパートナーの平均値が 33.4 歳、中央値が 33.5 歳であり、女性回答者のパートナーは平均値 38.2 歳で中央値が 38 歳であった。言い換えれば、男性側のパートナーとしての女性の年齢は 33 歳前後であり、女性側のパートナーとしての男性年齢が 38 歳である、ということになる。図 -3 は女性回答者に限定して、自身の年齢とパートナーの年齢を一つのグラフにまとめたものである。女性の年齢階層は 30 歳前後に傾き、そのパートナーは 30 代後半に山がきている。



3. 学歴構成

(1) 本人の学歴

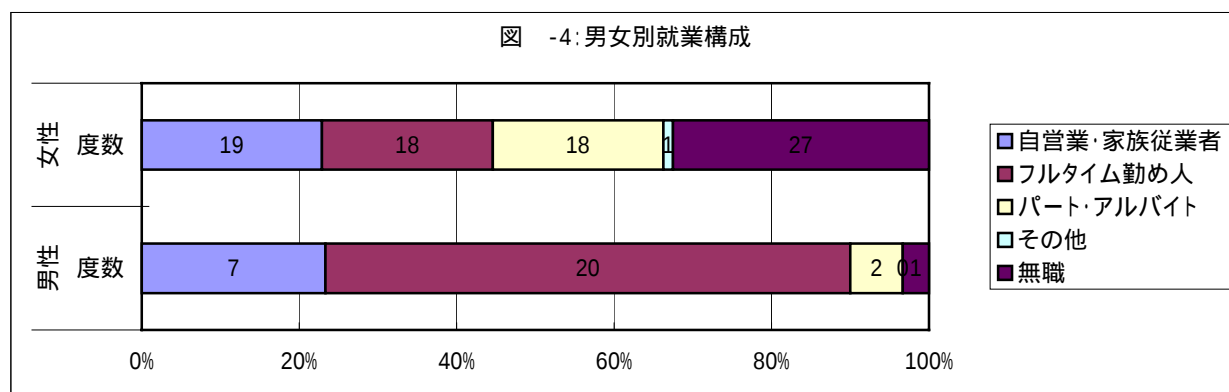
本人の学歴は、データから見る限り男性では「高校」と「大学・大学院」が同数で、女性では「短大・高専」が最大、ついで「高校」が多くなっている。本調査におけるサンプル構成においては全体的に分散する傾向があり、性別と学歴との有意連関については特定できなかった。

4. 仕事

(1) 就業形態

本人の就業

男性においては「フルタイムの勤め人」が 66.7% を占め、「自営業・家族従業者」が 23.3% を占める。対して女性は、度数が一極集中しておらず、多様性を見て取れるものの、それでも「無職」が 32.5% と最も大きな比率を占めている。



本人とパートナーの就業比較

なお、女性回答者のデータに限って、本人の就業形態とパートナーの就業形態とをクロスしてみた。実測値として一番大きかったのは、女性本人が無職で、パートナーがフルタイムという、性別役割分業の構図に即したものとなったと言える。このことから、ステップファミリーにおけるジェンダー差の存在を推測しうるといえる。

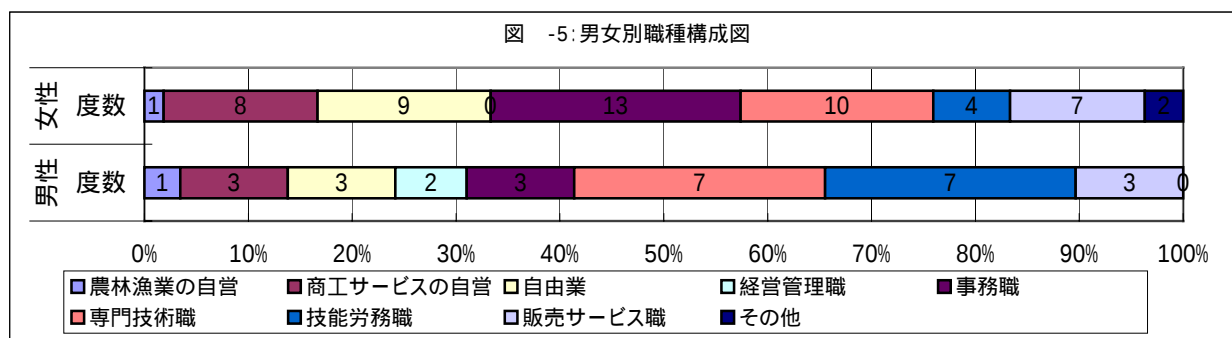
(2) 職種

本人の職種

次にその職種に注目する。下記の表は、上記の就業構成図より、「無職」を除いたものである。

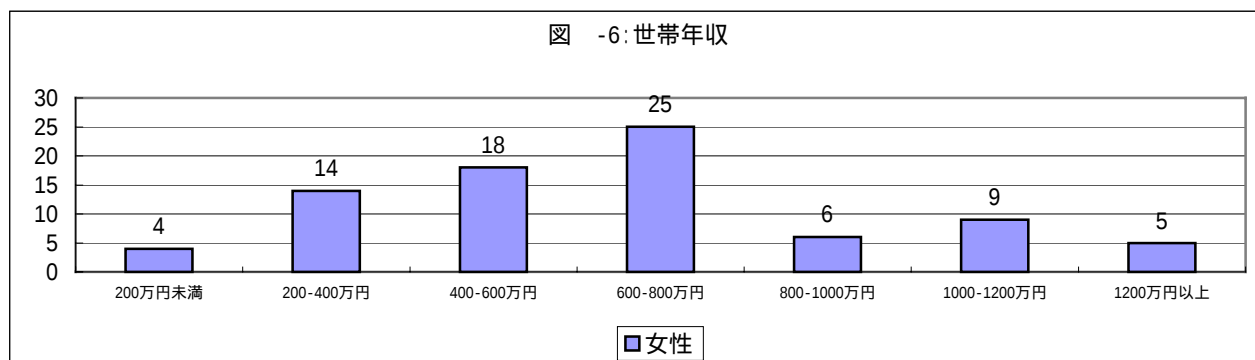
男性においては、「専門技術職」と「技能労務職」が最も多いが、女性側は「事務職」が

最も多い。



5. 世帯年収

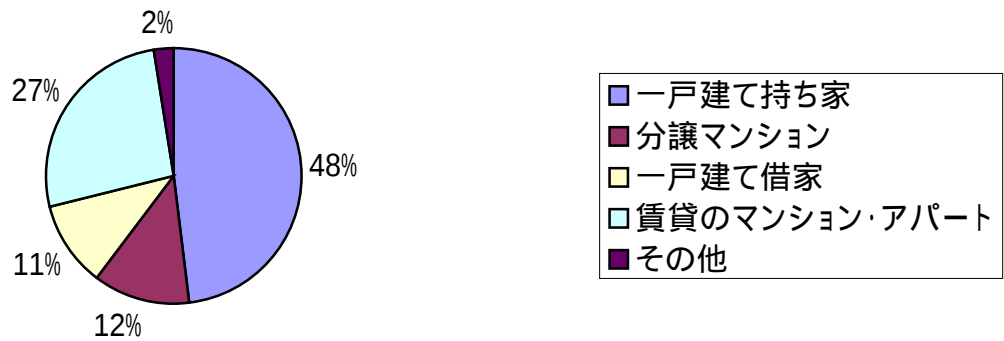
先にも述べたように、本調査データには一組の夫婦が別個に回答している例があることから、重複を避けるために、女性回答者に限って「世帯年収」を概観してみた。中位域としての 400～800 万円という層に全体の半数が集中しているが、400 万円以下の層をまとめると 21% 強のケースが存在し、また世帯収入が 1000 万を越える層でも 17% 強のケースがある。今回の調査回答者は、経済階層的に多様な人々を含んでいる。



6. 居住形態

居住形態は「一戸建ての持ち家」が圧倒的に多い。男女サンプルが同一世帯の属する可能性があるため、図 -7 は女性データのみから作成した。

図 -7:住居形態

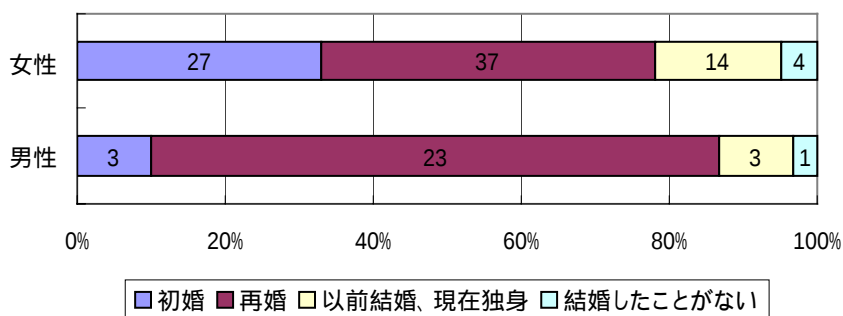


一戸建てと、分譲マンションを併せると 6 割が自身の持ち家を持っていることになる。この結果は平成 10 年度の総務庁統計局による住宅統計調査のデータとほぼ同値になっている。つまり、この点に関しては、今回の調査データはあまり偏りのない分布を示すデータであると言える。

7.初婚・再婚の別

図 -8 からわかるように、男性回答者のうち、初婚でステップファミリーを形成したのは 1 割である。対して、女性が初婚でステップファミリーを形成したケースは 3 割を超える。また結婚経験はあるが現在は独身であるケースと結婚した経験がないケース（いずれも事実婚あるいはプレステップファミリーを含む）をあわせると、女性の場合は 22.9% を占める。

図 -8:初婚再婚の別



女性の回答に限って見ても、パートナー（男性）は 6 割以上が再婚であるが、本人（女性）は男性と比較して初婚であるケースが多い。

8.結婚年数

対象者を男女別、結婚年数ごとに記載したのが次表である。ここでは便宜上、未婚者も含めて年数を5段階に分けている。調査対象者は結婚後0～2年までに集中しており、男女共にほぼこの範囲内で7割を占めている。結婚後5年以内に広げれば、男女共に8割をカバーできる。今回の調査回答者が、全体にステップファミリーの初期段階にある人たちに偏っていることがわかる。

9. パートナーとの同別居

有配偶者であったとしても、必ずしも同居しているとは限らない。それを示すのが上の表である。

女性のデータでも、25%におよぶ人々が（まだ）同居していないことがわかる。パートナーとの同別居を、初婚再婚の別とクロスしたのが次表である。同居していない、と答えた人たちの多くは「以前結婚していたが現在していない」というケースの女性である。また、数は少ないが、初婚や再婚であっても現在別居中というケースも存在する。

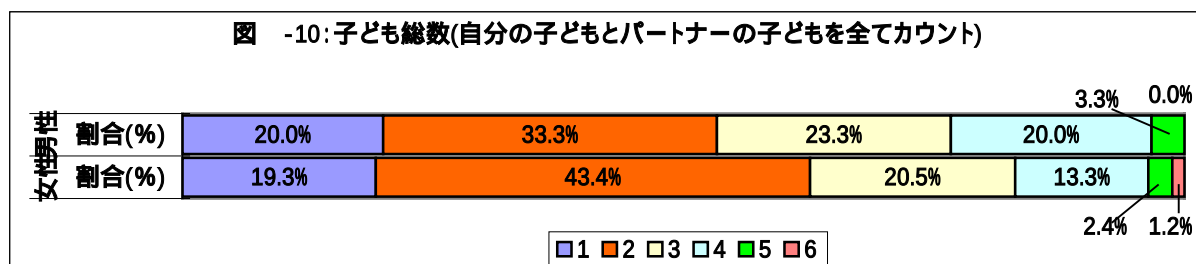
10. 親との同別居

ここでは回答者自身またはパートナーの親との同別居を見る。図 - 9 で明らかなように、どちらの親とも、別居している率が非常に高くなっている。

11. 子ども関連

(1) 平均子ども数

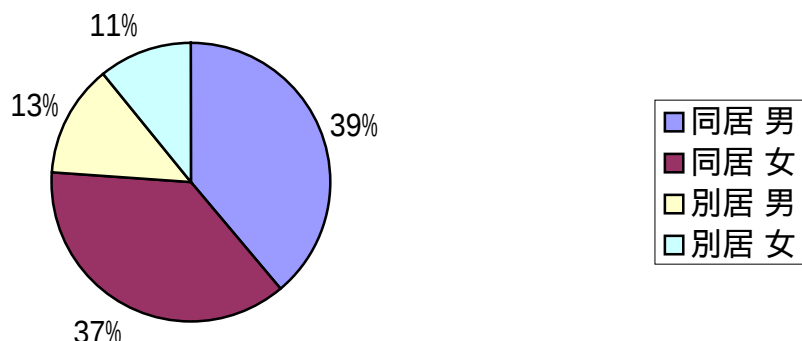
回答者自身とパートナーの子どもをすべて合わせた数を尋ねたが、その結果を図 -10 に示した。単に子どもの数を見るならば、平均は2.4人で中央値は2人である。先にも述べたように、データの重複を鑑みて、女性データのみ限定してみても、分布は大きく異なることはない。



(2) 子どもとの同別居

ここでは子どもに関するデータの重複を避けるため、女性のデータのみを用いている。
 なお女性データに限定した際の子ども総数は 197 人であった。

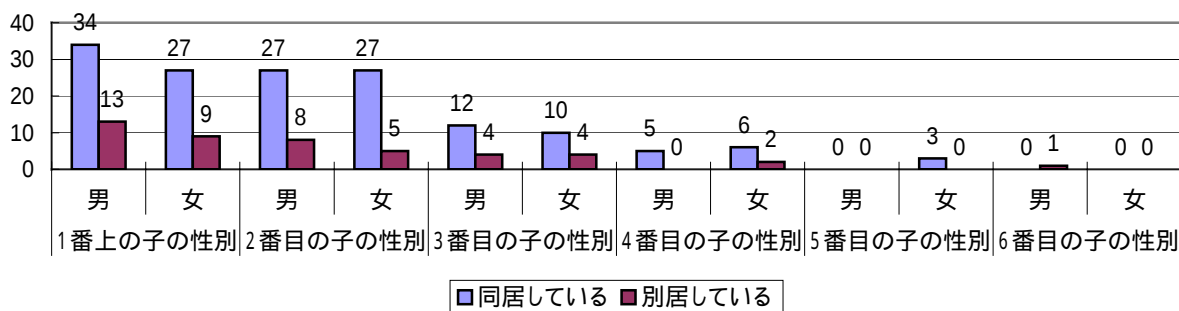
図 -11:子どもとの同別居(男女別)



今回の調査における子どもを総数として扱うと、その 76% が回答者本人と同居している。
 本調査の回答者と生活していないのは、男性 13%と女性 11%の合計 24%に過ぎない。

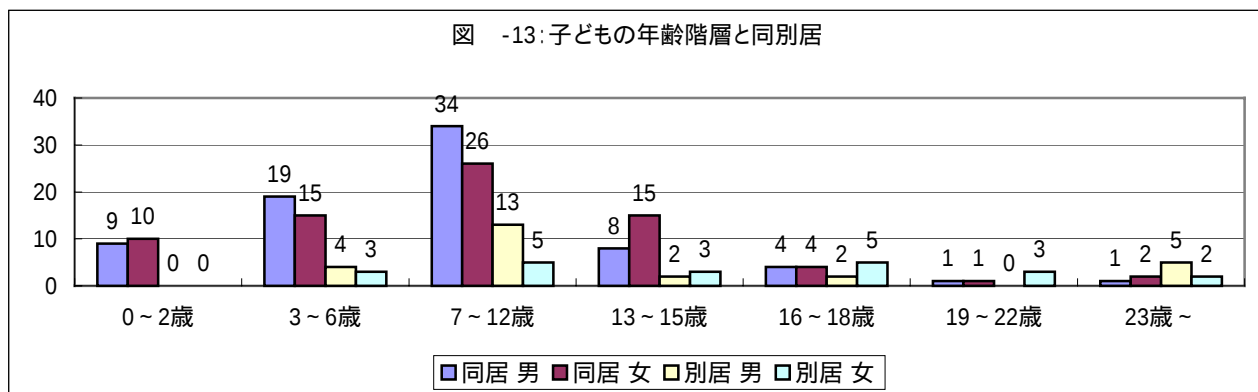
この総数としての子どもを、第 1 子から第 6 子まで出生の順位として扱ったのが図 -12
 である。

図 -12:子どもの性別と同別居



(3)子どもの年齢階層

次に総数としての子どもを、以下の年齢階層に区切って出力したのが図 -13 である。7
 歳から 12 歳、学齢と言うと小学生に対応する年齢階層のデータが最大値を示している。
 因みに、子どもの年齢の最年少は 0 歳であり、最年長は 39 歳であった。



以上、限られた視点ではあるが家族の概況について見てきた。なお、子どもとの関係については 章で再び詳しく扱う。